

未来につなげよう、古のなにわの原風景を伝える湿地

文

磯上 慶子(自然保護調査研究部)

なにわの片葉葦保存会



湿地のガマ (写真:なにわの片葉葦保存会)

大阪市西成区天下茶屋、住宅街の奥に阿倍野区との境となる上町台地の崖があり、その崖に面した空き地にヨシ群落があるのを阿倍野区在住大島新一郎氏が見つけたのは2011年9月のことでした。

大島氏は、その空き地が湧水に涵養された湿地を有し、ヨシ群落の中には葉が茎の片側にのみ生える片葉と呼ばれるヨシが多数ある事を確認、この場所を保全すべく「なにわの片葉葦保存会」をたちあげました。

なにわの片葉葦保存会は、この湿地は未来へ残す大切な場所と考えています。それは此処が大阪市内に残る豊かな自然であり、加えて湧水によりヨシ群落が広がるという今は見られない古の大阪の姿をも垣間見ることができると思われるからです。

空き地は480㎡の長方形、東に上町台地の崖、西の道路と北隣地との間はフェンスで仕切られ、南側は隣家の壁と接しています。崖はコンクリート擁壁で湧水はその基部から溢れていると思われ、崖際の深い場所は50cm程度。空き地の三分の二ほどに広がる湿地部は数cm~10cmの水深で、土地中央部から道路側にかけて土がやや盛り上がり乾燥した草地となり、湧水はその乾燥部を挟み土地の左右両端から道路側フェンス外へと流れています。

この湿地の特徴は、湧水による湿地にヨシを中心とした湿地植物が生育し昆虫や野鳥が集まって自然豊かなビオトープを形作っている点で、これはお金をかけてビオトープが作られている事を考えれば非常に貴重な場所だと判ります。

私たちはこの場所の豊かさを知るほどに保全をとの思いが募るもの。まだ保全協会に参加していなかった事もあり、どうすればいいかわからず、まずはこの湿地を知る事から始めました。ご縁のあった鞆公園自然研究会の方々のご助力を得て、大阪市立自然史博物館の方にこの湿地をお伝えしたところ、幸いにも2012年9月から2014年7月にかけて数回植生調査が行われました。結果21科55種の植物を確認、うち31種が在来種でした。大阪市内で見ることの少なくなった湿地を好む在来植物も12種みつき、さらにこの狭い面積の湿地内にガマ、コガマ、ヒメガマの3種がそろって見られる事も判明しました。ヒメガマは市内公園の池周囲などにも見られますが、ガマ、コガマは殆ど見られず、コガマに至っては大阪府レッドリスト2014において準絶滅危惧種となっています。また湧水と豊かな植物のおかげでトンボ類をはじめ多くの昆虫、それを求め飛来する沢山の野鳥とに出逢える場所である事も判りました。2014年開催の第45



コシボソヤンマ  
(写真: なにわの片葉葦保存会)



崖上より湿地全景 (写真: 金谷 薫)



湧水 (写真: 金谷 薫)

回特別展「ネコと見つける都市の自然」の一調査地として選んでいただきました。

次に、豊かな自然環境だけでなく、私たちは湿地がこの場所にあることの意義にも着目しました。それは大阪とヨシ(葦)との係わりの深さです。大阪市域は河内潟或いは河内湖へ上町台地が突出していた時代を経た後も、淀川河口域や沿岸部などを中心に湿地が広がり、広大なヨシ原も見られたようで、それは「なにわ」を代表する光景として能や和歌などに多く取り上げられてきました。

海原の ゆたけき見つつ蘆が散る  
難波に年は 経ぬべく思ほゆ  
(万葉集 大伴家持)  
秋風に 潮みちくれば難波江の  
葦の穂よりぞ 舟もゆきける  
(重之集 源重之)

ヨシが「なにわぐさ」の別名を持ち、「葦」と「難波江」が縁語である点などからもヨシと大阪の関係は深いように見受けられます。そしてこの空き地のように台地の下部でも湿地環境がありヨシ原が見られたと考えられる事から、此処に葦が群なす光景は古の大阪の原風景ともいえるのではないかと思います。

保存会は最初、名称通り片葉の葦保存の為に結成されました。片葉の葦自体は全国にみられ、多くは各地の伝説伝承と結びつき地域の歴

史を体現するものとして大切に扱われています。大阪もまた下記の歌や諺などより、古くから片葉の葦との繋がりが深い事が伺い知られます。

草の名も 所によりてかはるなり  
難波のあしは 伊勢のはま萩  
〈菟玖波集:救済法師〉※  
難波江の 片葉のあしの  
結ばれかかり 〈清元:住吉踊〉  
※神都名勝誌には「浜萩 中略  
片葉の芦といふ」(植物一日一  
題:牧野富太郎)とあり、この難波  
のあしは片葉を指すとみられる。

ただ、ここに一つの問題がありました。それはここが国有地の売却予定地だという事です。皆さんご存知のように国所有の希少な草地が保全という視点もなく民間へ払い下げられることにより消失する事例が後を絶ちません。この空き地が大都市に残る湿地かつ市内の生物多様性を支える場として貴重であり、また大阪の原風景という歴史的意義の両面を併せ持つとの視点から、現状のまま未来へ引継ぐにはどうすればいいのかを保存会では考えてきました。まず地域資産価値明確化のため専門家方々のご協力による植生調査、大阪市立自然史博物館projectU、地域自然史と保全研究発表会2015ポスター発表、等々へ参加しました。また、誇るべき地元の宝として存在を近隣へ周知

する為、小学校へ片葉の葦移植、小学生の湿地見学、高校課外授業対象地、講演会開催などを行ってきました。今後も引続き自然関連の調査を進め、全国の草地湿地保全の方々と情報交換を行い、大阪市内で奇跡的に残った大切な自然を、未来へ護り伝えていきたいと考えています。

最後に、何も判らぬ私たちに手を差し伸べ助けて下さった長谷川匡弘学芸員、故・辻井隆昭氏、梅岡宏史氏、奥野晴三氏、桂孝次郎氏に厚く御礼申し上げます。

#### 参考文献

- 大阪市立自然史博物館 (2014) 都市の自然2014 第45回特別展 ネコと見つける都市の自然  
-家の中から公園さんぽ-解説書  
長谷川匡弘・藤井俊夫・佐久間大輔 (2014)  
大阪市西成区の住宅街の中に残る「湿地」  
～生育する植物相の報告～ Nature Study 60 (8)



片葉の葦(大阪市立自然史博物館蔵)